
メッセージを残して...

音円布

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メッセージを残して…

【Nコード】

N1871J

【作者名】

音円布

【あらすじ】

主人公の原谷和葉は先輩の高田彰彦に恋心を持つ。しかし彼女は乳がんを受け持った母親がいたためなのか、遺伝なのか分からないが、和葉は乳がんに晒される羽目に…。高田先輩との恋と乳がんに打ち勝つために彼女は入院することに。果たして恋は上手く行くのか、また乳がんになった彼女はこのあとどうなるのだろうか…。

メッセ？

4月1日、無事一次試験で内定を貰った会社に入社。

部長からは「一週間以内に人間ドックを受けるように」と命令された。

「何でだろう…」多少疑問に感じたが、そこまで深く追求はしなかった。

まさか自分の運命が人間ドックによって決められるとは知らずに…。

それから一週間後。部長に「人間ドックの結果を出してほしい」と言われた。

受けた時は何の異常もなかったから何の不安も無くいつも通りに過ごしてきたけれど、人間ドックを受けるにあたって、変に緊張していたせいもあるだろうから、多分どこか変にレントゲン写真に写ったのかも知れないと考えていた。

結果を出してから二週間が経った。そんなある日のこと、部長から呼び出しを喰らった。

「ミスもしていないのに何で呼び出しなんぞ喰らうのだろうか」と思いながら部長室へと重たい足を運んだ。

コンコン。

「失礼します、原谷ですが…今宜しいでしょうか？」

「どうぞ。」

「失礼いたします。」

カチャとドアを開けた。

部長は座っていないく、窓の外の景色を見ながら立っていた。

「おお、原谷君か…まあ、座りたまえ。」

「あ…はい…。」

言葉が続かないままシーンとなった部長室。

こんな空気の中で一体部長は何を話すのだろうかと考えていたら部長から話を切り出した。

「……………、この前に受けてもらった人間ドックの結果に少し怪しい点があつてな…」

「……………へっ？」

「まあ、そういうリアクションもありだけど…。」

原谷君。君、もう一回この点だけ受けてもらえないだろうか…？
「ええ、構いませんよ、ヘリウム、あれもう一回やりたいなっと思つてたんです（笑）」

「そのノリならいいか、多分大丈夫だろうけど…やはり一人引つかつてるとどうも気になつてな…」

「え、一人つて…」

「そう。君だけ引つかつてたんだ。受けてくれるよな？」

「はい、もちろんです、皆さんにご迷惑掛けたくありませんから。」

「そうか。それならいいだろう。もう帰っていいぞ。」

「失礼いたしました。」

人間ドックに引つかつていた点は乳がんの検査の点。結構前に胸に違和感を抱いた記憶は無い事は無かった。そうは言っても当時はまだ高校生になりたてだった時。最初はただの疲労だろうと思っていたが、この検査結果を見てなんだか怖くなってきた。

「乳がん検査また受けないといけないかな…」

ふと本音を吐いた。そしたら憧れの先輩に声をかけられた。

「どうしたんだよ、原谷。そんな深刻な顔しちゃまって…何か嫌なこ

とでもあつたのか？」

「高田先輩……。」

まさか乳がん検査に引つかかったんです…なんて言えやしない。それは好きな人だからこそ迷惑もかけたくないから。

「な、何でもないですよ……。」

嘘をついた。

「じゃあ、その持つてる検査結果の紙何なんだよ？」

驚いた。

「え、あ……いや……これは……その……あの……。」

「検査結果、どこか引つかかってたんだろ？どこ引つかかってたんだ？」

「え……。」

「同期には見せてただろ？」

「……っ先輩……っ。」

落とすつもりなかったのに紙を落としてしまった。

「……乳がん……か……。」

「あ、いや、でもまだ何とも言えないです……ただ検査結果に引つかかったっただけであって……。」

「……この病院よく当たるんだって。」

「そんな占いみたいに言わないでくださいよ……。」

「いや、占いみたいとか言うけど……。」

「何ですか？」

「俺もここ入社する前に受けたんだけど、当たったんだよ…」

「……先輩が…ですか？」

「俺じゃないけどな…」

「けど…何ですか？」

「俺の上司が…」

「あ、それ以上はいいですよ、言わなくても平気です。」

「そ…そうか…悪かったな…」

「いいえ…」

「…病院、行くんだろ？」

「はい。今から行かないと明日病院休みですし。」

「そっだ、俺も一緒についていっていいか？」

「へ?!」

「……こんなの…職場で言う事じゃないかもしれないけど…」

「………」

「俺、和葉ちゃんのコト好きだから…」

驚いた。まさか先輩が私のコト…って思ってもみなかったから。

「…っ先輩…っ私も…先輩のコト…」

「和葉…ありがとうな…」

原谷には幼いころから両親と兄弟がいない。小さい頃は祖父母に育てられた。

「…なあ、和葉。お前の両親って…」

「小さい頃からないなかつたんです。祖父母に育てられて、今は皆雲の上の人。」

「…そうか…なんか悪い事聞いちゃったな…」

「………。あ、先輩のご家族は…??」

「…俺は、ちゃんと両親はいるっちゃんいるんだけど…」

「…どういう意味ですか？」
「離婚してんだ、俺の両親。今は実家に母親だけが暮らしてる。」
「いつくらいですか？」
「…えーと…俺が小5くらいかな。もう少し小さいころに離婚したかったらしいけど。」
「そうなんですか…」
「『もうあの子も小5よ?!離婚なんてキーワード出しても理解できる頃よ。』って言われてさ。」
「シヨックでしたよね…?!」
「そりゃね。子供ながらに『あ、父さんじゃなくなるんだ…』って理解してた。」
「なあ、和葉?親が実際(生きて)居ないと、(生きて)居るのってどっちが辛いと思う?」
「…難しい質問ですね…。私は実際に居ないから分からないですけど…でも…。」
「でも?」
「でも…もし実際生きてるのに居ないのは寂しいんじゃないかな…って思います。」
「何で?」
「だって、居るんですよ?!それなのに…っ」
「あ、だからといって会えないって訳じゃないんだよ。たまに、本当にたまーに会えるから。」
「養育費とかって…」
「まあなんとかなってるらしいけどな…」
「そうですね…」
「今は…一人暮らしだよな?」
「今…ってかずっと前から…」
「何年くらい前から?」
「もうかれこれ10年は一人暮らしです。祖母が最期の最期まで居たのは今から10年前ですから。」

「…ちなみに皆はどういった経緯で？」
「祖母から聞かされてたのは、両親は事故死。兄弟は元々いないので一人っ子。祖父は病死…で、祖母も病死…でした。」
「そうか…。」

話をしている間にふと外の景色を見上げたらもう辺りは真っ暗だった。

「へ?!」
「どうした？」
「今何時ですか？」
「えと…18時30過ぎ。」
「夕飯の支度忘れてた…っ」
「…可愛いなあー…」
「な?!何言うんですか?!」
「俺手伝いに行っていい？」
「え、でも…」
「俺も一人暮らしだし、実は昨日家に帰ってないんだよ。会社で残業してたから。それに…」
「それに…??」
「和葉の家行きたいって思った。」
「本当ですか?まさか…他の目的あって…とか無いですよね?!」
「さあ?それはどうかなw」
「先輩…。それで、どうするんですか？」
「行っつていい？」
「はい!」

和葉の家は会社から2つ目の駅が最寄りの駅。

そこから徒歩1分。

セキユリティーもちゃんとした所に入ってるので安心。

「……………」

「ん？どうしました？」

「いや…ビックリしたよ。まさかここに住んでるなんて…」

先輩の意味深な言葉に「？」を頭に掲げていた。

「あ、俺…この5階なんだ…」

「ご、5階ですか?!良いなあ…私3階ですし…。」

「ここなら安心だもんな。良かったよ。」

「あ、上がったら先輩の家行っていいですか…?」

「もちろん!」

「なあ、和葉。部屋…てか寝室入りたい…」

まさかのお誘いの言葉。

ここで断ればまだ純粹で居られる。等。

「断るのか?断らないよな?」

選択肢は二つ。

「じゃあ、和葉。お前の好きな手を俺から奪え。」

「へ?」

「右ならHはアウト。左ならOK。俺の手から見て…だからな。」

男の人とそういう関係を持った事が実際今まで無かった。

でも今はちゃんと彼氏として二人っきりで居る。

家に呼ぶ〓そういう関係になる。

和葉の答えは果たして。

「先輩。先輩の左手出して下さい。」

答えはOKを出した。自分にNOの選択肢は消えた。

「いいのか…？俺優しくする自信ねーぞ。」

「それでもいいです。先輩がしてくれるなら…」

そして高田と原谷は結ばれた。

メッセ？

高田と原西が付き合う事になってから二週間後。再検査を受けに会社から言われた病院へ行く事になった。それまで時間はあったのだが、忙しかったせいも、なかなか病院に行けなかった。また、高田と原西は同棲しようと考えていて、引っ越し先も考えながら会社に行っていた。

そんなある日のことだった。

「再検査…どうなのかな…」

「何、心配する事ねーよ。」

「でも…っ」

「大丈夫。」

実は会社宛に再検査の結果が届いたため、呼び出しを喰らっていた。

「さ、入ろう。」

社長室に入るのはなんだか気が重かった。でも高田に支えられてノックをした。

「はい？」

「原西です。あと高田先輩も一緒です。」

「まあ、いい。入って。」

「失礼します。」

カチャ。

「あのお…」

「お、原西君…。あれ？何で高田も？」

「前川社長。原西に報告する前に、先に報告しておきたい事があります。」

「何だね？」

「俺達、今同棲中なんです。」

「まあ、原西には親御さんがいないらしいしな。俺は別に反対なんてしないから安心しろ。」

「……！」

「で？報告それだけか？」

「はい。」

「良かったな。おめでとう。」

「ありがとうございます！」

「それで……こんな良い報告の後……こんな事言っの俺本当嫌なんだけどよ……」

検査結果だとすぐに分かった。

分かったと気付いてから緊張してきた。

「原西君、そして高田君。」

『はい。』

緊張の一瞬。

「原西君はな……乳がんの検査結果だったんだが……」

「……。」

「検査結果は……乳がんだった……」

「……。」

ショックだった。言葉が出てこない。

「で、入院してもらおうことになる。」

「……いつ頃ですか？」

言葉が詰まった。

「……できれば、明日……もしくは今日のこの後からでも……遅くはないぞうだ。」

「……入院に対して抵抗があるわけじゃないですけど、高田先輩と相談してからでも大丈夫ですか？」

「ああ。それからの方が良いだろう。それに。」

「それに？」

「いや、後で高田に言うよ。」

「はあ。」

「それじゃ、お大事に。お見舞いには行くからな。」

「…お忙しい時期にこんな事になってしまって申し訳ないです…」

「良いの。そんな事気にしてたら自分が参っちゃうよ…」

「…分かりました。失礼します。」

社長室を出た。

「…つつひつく……っ」

「とりあえず、落ちつくう？な？」

「…つつ」

「はいよ。」

渡されたのは和葉の好きな缶コーヒー。

「先輩……」

「ん？」

「私…生きられる…？」

「おま、何っーこと言ってたんだよ……」

「だって…!!何っつ不安なんだよ…っ!!」

「俺がいる。だからといって俺だって不安だよ、正直。」

「…」

「でもな、二人で居るって事が何より大事なんじゃねーの？」

「…そうだね…」

「病院。この後行こうな？」

「うん。」

高田と原西は同じフロアで働いていたため、上司も同じ人。

上司にもお互いの同僚にも同棲してる事を伝えてはいた。しかし病

気の事は触れていなかった。

「小池さん。」

「おー、どうした？二人改まって。まさか結婚か？」
ざわついた。

「ち、違います！そうだと良いんですけど…ちょっとそんな良い話じゃないんです…」

「…え？」

何か嫌な予感を小池は感じとった。

「この後二人で早退したいんです。和葉、かなりヤバいらしいんです…」

「病院でも行くのか？」

「ええ。」

「でも今ピンピンしてんじゃんよ。」

「私…これから入院するかもなんです…だから…」

「なるほど。病名は高田から聞くとするから、帰っていいぞ。」

「ありがとうございます。」

「また何かあったらすぐに言えよ？」

「はい！」

「それじゃ失礼します。」

そして会社のビルを出た。

会社から病院までは歩いて5分とかからない近くて大きな総合病院だった。

「先輩…もしかしてここ？」

「そう。」

「私、入院したことないからちょっとドキドキしてるんだ。」

「そっか。実は俺も入院したことない（笑）」

「そうなんだ！」

自動ドアを開けて中に入る。一応受付に行く。
「あ、原西さんですね、どうぞこちらです。」
とりあえず、看護師さんに着いて行く事に。

案内された部屋は362号室。

「こちらです。個室しか開いてなくて…スイマセンね…」
「いえ、大丈夫です。」

「今日からお世話になります、看護師の大田原と申します。宜しく
ね、和葉ちゃん。」

「はい、よろしくお願いします。」

「隣の男性は？」

「彼氏の高田です。」

「結婚してないんだ？」

「その予定だったんですけど…予定変更です。」

「別れるのかしら？」

「違いますよ。本当はこんな話じゃなかったら結婚する予定だった
んです。ね？和葉？」

「うん…」

「なるほど。」

「へ？」

「ううん、こっちの話。それじゃ、もうじき先生来ると思っつから
うちよつと待っててね。」

「はい。」

「…先生って男？」

「じゃないの？」

「だよな…」

「妬いてるの？」

「…！違っ…！」

「単純なんだから。大丈夫。婚約だつてしてんのに、今更？って感じするでしょ？」

「そうだな。ゴメン。」

「大丈夫だから安心して！」

コンコン。

「ハイ？」

「失礼します。あ、原西さんの担当の友重と言います。」

「あ、宜しくお願いします。」

「えと、二人は病気の事知ってるんだよね？」

「はい。」

「原西さんも彼も大人だから多分大丈夫だと思うけど……」

「……」

「原西さん。」

「はい。」

「えと……」

「高田です。」

「原西さんと高田さん。」

「はい。」

「乳がんなのは御存知だと聞きました。」

「はい。」

「宣告させて頂きます。」

「……」

先生が何を言ってるのか理解できなかった。

「……」

そして先生の言った事がフラッシュバックした。

「ええ?!」

「冗談だと思ったかった。でも冗談で受け入れるようなものではな
かった。」

「何か…自分で気付く…とかってあります?」

「自己意識は…難しいと言っても過言ではありません…」

「…」

「手術は?」

「無駄の抵抗だと思って下さい…もう手がつけられないんです…」

末期だった。それ故、他にもがんが転移していたのだった。

「そんな…」

そして原西和葉の入院生活が始まったのである。

メッセ？

入院してから一週間が経ったある日。

高田はなるべく早く仕事を切り上げてお見舞いに行こうと考えていた。

それでもしないといつどうなるか分からない和葉の身体が心配だったから。

コンコン。

「はい。」

はいの返事に元気が無いのが分かった。

「和葉。お前元気ねーじゃん。どうした？」

「…そんなことないよ？」

「またそんな嘘ついて。」

「何で？」

「声に元気が無いのはそれだけ体力にも元気が無いってことだから。」

「元気だよ。」

「無理すんな。あの医者からあー言われてショックだったんだろ？」

「…!!」

高田はこないだ医者に言われた事をずっと考えていた。

『和葉さんは…余命1年…と少し…と言うところでしょう。』

『へっ？』

『なのでこれから長いか短いかの闘病生活となりますが、一緒に頑

張っていきましよう。』

『余命1年…と少して…??』

『2、3カ月が峠だと思って下さい。』

『そんな…』

『でももし和葉さんの生命力が強かったらもつと長く生きられるかもしれません。』

『本当ですか?』

『ええ。ですがこれは和葉さんの生命力に関わってきます。』

『はい。』

『色々薬で試したりもします。それによっては副作用も出てくる可能性は高いと思って下さい。』

『先生。』

『はい?』

『色々宜しくお願いいたします。』

「こんなやりとりが続いたあの日から和葉の顔色だけは悪くなる一方で。

身体は悪くなってる筈なのになんだか良くなっている気がしていただけだった。」

「先輩…」

「ん?」

「明日も…来てくれますよね…??」

「当たり前な事聞くんじゃないよ。毎日ウザいって程来てやるぞ。」
「ありがとう。」

久しぶりに和葉の笑顔を見たような気がした。

「何だよ？たまに笑顔見せるところがちがドキドキするじゃねーか。」

「えー？ダメ？」

「ダメじゃねーけど。寧ろ嬉しいよ。」

キスしたい。抱きたい。正直いつまで自分の理性が保てるかわからなかった。

でも。

キスだけでも感染症だってあり得る。そつも告げられた。

そんな事言われたら何も出来なくなってしまうのは嫌だった。

だから入院する一日前に和葉を愛して良かったと心から思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1871j/>

メッセージを残して...

2010年10月17日18時10分発行